

■（１５９）大雪で再認識、紙と電子の連携

約１０年前に勤務していた甲府が、先週末の大雪で、１メートルを超える積雪に見舞われた。南アルプスや富士山に囲まれた山梨県は、道路、鉄道とも寸断され、陸の孤島と化した。県外で刷った全国紙の新聞も運び込めず、読者に届けられない事態となった。

全国紙は週明け、自社のヘリコプターで大量の新聞を甲府方面に空輸した。現地で受け取った販売所が、車や徒歩などで読者宅に届ける努力をした。鉄道が再開してからは、本社の社員らが新聞の梱包を電車に持ち込んで山梨まで運んだ。

そんな折、代替手段として有効だったのはインターネットだった。新聞社と販売所は今、専用のネット網で結ばれている。雪害情報などをまとめた紙面データを一斉に送信すると、販売所はダウンロードしてコピー機で印刷する。住民に配ったり、店頭に張ったりできる。有料の新聞電子版も無料で開放。東日本大震災でも見られた通り、紙の弱点をデジタルが補う構図だった。

新聞がネットでニュースを流し始めたころ、販売現場から「紙が食われる」と反発された。それが、あっという間に各新聞が電子版を出す時代に。時計は確実に回っている。(山)